

その世界は☒最悪☒

とほくれす

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

最悪なヒーローがクソツタレな世界に前触れもなくやってくるだけの話。

※どっちの作品もよく知らなくても何とかなるかもしれない。コミックのヴェノムは分かってないです。

目次

エンカウント	1
”俺たち”のシゴト	11
最低なお節焼き	20
シンプル・イズ・ベスト	30

エンカウント

「あー落ち着こう、落ち着こうぜ、なあ？ 別に俺達はお嬢さん方を取って食おうってんじゃないんだ、マジで」

パーカー姿の男が手を上げて気さくに笑う。勿論、構えられた少女達の銃は下ろされなかった。

彼はエディ・ブロックと言い、誕生日は第三次世界大戦以前と答えた。だがそれにしても若すぎる、2062年だと言うのに彼は老人どころか味のある成人男性の顔つきをしていて、とても40、50代ではない。

寂れたビルの屋上。昼間とは言え冷風が吹くからか、エディは少しだけ身震いする。

そして、「また」一人で喋りだす。

「いや、待て。食うな、女を食うとかお前の趣味は最悪だ、食って良いのは悪いやつだけ。言っただろ？————オーケー、そうしてくれ」

「誰と喋っているのかしら、エディさん？」

単身で前に出たのはKar98k、SOG地区基地の小隊の現リーダーに当たる。たった一つしか無い小隊で選ばれたリーダーらしいのだが、エディから見ても彼女は統率者としてのパワーを秘めていると感じる。

じつと値踏みするような鮮血色の瞳に、エディは苦笑いをして首を振って誤魔化そうとする。

「ゴツチの話だよ、ははは………とにかく俺達は敵意なし。お嬢さんも危険はない。お望みなら全裸で言ってもいいんだが、それだけじゃ信じてもらえないかい？」

Karは答えの代わりに、端に転がる「それ」を一瞥して拒否を示す。

其処に有ったのは無残に端子をむき出しにされた鉄血兵。首から上のパーツがまるまる無いのは奇妙であるが、Karの知識に照らし合わせるならそれは前衛型のGuardと呼ばれる鉄血だ。

それだけじゃない。そんな風に腕がちぎれたり、足が滅茶苦茶に折れ曲がっていたり、とにかく酷い状態で機能停止に追い込まれた鉄血の残骸が相当数有る。

彼女達の指揮官いわく「はぐれた人形の反応はない」筈なのに、だ。状況証拠としてエデイが実行犯になつてしまう。どうやって警戒しないでいるという話だった。

「私は貴方が此方に敵対しているとは思っていませんの、態度は完全降伏ですもの。そもそも私達人形は人間に危害を加えられる訳でも有りません」

「に、人形？ まあ、ともかく信用してもらえた——」
——ですが。

Karが静かに脳天に向けてその騎兵銃を構えた。エデイは銃に詳しい覚えはないが、少なくともそれは今発砲できそうだという事だけはよく分かる。

「おい待て、いや出来の良い銃だな。俺は銃なんてさっぱりだが値打ち物なのは分かるぞ、それを俺みたいな一般市民の返り血で染めちや銃が可哀相つてもんだろ？」

「お褒め頂きありがとうございます」

冷や汗が止まらない、苦笑いも張り付いてくる。エデイはどちらかと言えばKarを心配していたのだがそれを知る由もない。

「ですが。今、私は貴方に銃を向けてしまいました——意味することはお分かりでしょうか？」

何か答えようとしたのも束の間、エデイは突然手を降ろしたり上げたりしながら誰かと口論を始める。

「わ、分からないなあ——あ、待て。ダメだダメ、せめてアツチが撃つてきてからだって！ 俺達は警戒されても仕方ないからな、待て！ 良いか、待つんだ。お前、もしも出てきてみる後で三日ぐらい飯抜くからな！」

誰かを叱りつけるような口調だが、彼の周りにはそんな親しくかつ加虐可能な味方などいない。

その様子を見ていたKarは彼が狂人か何かだと思ったんだろう、

わざとらしく彼の耳のすぐ横に弾頭を掠めてみせる。すぐさま槓桿を引くと次弾装填を終えてしまった。

——更にトーンダウンしたK a rの忠告。

「つまり貴方は人間ではありません」

「え、ウソ!? お前のせいだぞ、人間じゃないとかまで言われてるし!?

散々だ!」

一人で喧しく騒ぐエデイに冷ややかな命令。

「次は頭を狙います。お静かに」

「悪かった、お嬢さんのためにも俺は静かにさせてもらう——

——俺はな」

一瞬、彼の後ろに黒いなにかが蠢いたように見える。

暫くエデイが沈黙していたのを確認した後、K a rは彼の後ろに回り込んで銃を頭に突きつけながら歩くよう促す。

「普段ならばいざ知らず、此処は戦場ですので。ごめんなさい、このまま歩いていただけますか?」

「まあそうなるよな。好きなだけ警戒しといてくれ、何にもしなけりや後で可愛いお嬢さんから涙目の謝罪も聞けるんだしな、俺はハッピーかもしれないぞ」

「そうですね。そうなることを私も願います——」

K a rが答えてる最中、突然其れは起きた。一瞬のことだ。

まず鉄血兵が一斉に扉から突入してきた。決して二体三体などと笑い過ごせる量ではなく、およそ二十。瞬く間に彼女達は取り囲まれた。

——そして次に、エデイは。いや、「ソイツ」が其処に居た。

黒い歪な塊に包まれていくエデイをK a rは至近距離で見た。そ

れは例えば液体のようで、固体のようで、しかし気体のように何処からともなく彼の身体を覆っていく。

あつという間に彼を包み込んだその黒い何かは、最後にエデイの顔を覆った。見えた顔は大きく裂けた歯並びの悪い凶悪さそのものの口、そして何処を見ているのかすら分からない白目だけの大きな眼に似ている何か。

『おい、コイツラは食って良いのか？ 限界だ』

明らかにエデイとは違う声。ソイツは確かに言った。

アレを。鉄血を。あろうことか、「食って良いのか」と。Karはあまりの異様さに少しばかり目を見開いてしまう。

「ああ、食っても良い。良いが、何とか遠慮を覚えろ」

ソイツはすぐさま疾走りだした。いや、疾走っている前振りを見せたのだがそれは走るといより跳躍か。

構えていたGuardに黒い巨躯が降り注ぐ。あまりに異様な動きに気圧された鉄血達はソイツに銃口を一心に集めて止めにかかった。

——しかし無反応。弾丸が身体に吸い込まれるように消えていくと、時折煙を上げるだけ。

弾丸の暴風雨などそよ風のように、悠長な態度でソイツは語りかける。

『じゃあ食う。美味そうだな、まずお前』

長くぬめりけの有る舌がGuardの頬を撫でる。唾液が頬に残るとその表情が恐怖に変わるが、ソイツはそのまま大口を開けて頭を丸呑みすると食い千切ってしまった。

見た目通りの残虐、かつ野蛮。バイザーを吐き捨て、抵抗する力を

失った屍体を片手で引きずり出すと大立ち回りが火蓋を切る。

Jeagerのライフルから放たれた弾だけをソイツは手で受け止めると、全く同じ方向に投げ返して撃ち殺す。正確かつ大雑把、道理の通っていない反撃に鉄血が小さくどよめく。

『不味そうだ、俺に投げるな』

「不味そうと言うか食うなよ、今の頭の感触だけでももう思い出したくないったらありやしねえ！」

余裕綽々に会話をするソイツラを誰も止められない。

突然にその体が崩れる。身体を自在に変形する姿は異様どころで済ませられない様相だったが、そんな事を考えている間に伸ばされた新しい腕で何体かが引き寄せられていつてしまう。

尚抵抗を辞めない鉄血をお構いなしに乱暴に殴り飛ばし、脚を持って振り回すと最後には頭をガブリ。時折うええ、と呻くようなエディの声。

「だから遠慮しろよ！ 吐きそうだ！」

『ちよつと硬いが美味いだろ。エディも後でゆつくり食え、分けてやる』

「要るか!？」

やたらとコミカルな会話に反して動きは豪快。寄せた鉄血を殺し終えると、また床を崩す勢いで跳躍。

着地地点から適当に一体を見繕って武器代わり。銃弾は吸い込んで吐き出す身体、あまりにも圧倒的——鉄血たちも流石に気圧される。

しかし虐殺は止まない。一体の頭を握りつぶしながら、脇から伸びた触手が他の二体をぶつけて頭から破碎させると投げ捨てる。その触手に射撃を加えてもやはり効果はなく、それは軟体動物のような仕組みをしながら尋常でない強靭さを帯びているのが分かる。

——ならば、今度は標的を変えるのみ。

Jeagerの一体がKarに向かって狙撃。完全にソイツに気を取られていると油断していたKarの目と鼻の先にまで銃弾が突き付けられる。

『俺が居て良かったな』

黒い腕がK a rのブーツに絡みついたかと思うと、凄まじい勢いでソイツの方に引き寄せられていく。

正体は、ソイツの背中から伸びた長い長い腕だった。もう滅茶苦茶だ、理屈が存在しない。恐らくソイツは自分の都合のいい形になれるのだ、それは例えどんな不可能でも関係ない。

兵士が想定しない、いや想定しない最悪の敵のパターンだろう。生命の想像の限界の動き。

「きやつ!？」

しかしあまりの力にブーツがすっぽ抜けてしまった。宙に投げられたK a rを他所にエデイが怒る。

「バカ！ ブーツ脱げてるじゃねえか！」

『お前、足が細すぎる。もっと食え』

そう言いながら今度はサツシユベルトあたりに腕が絡みつく。浮いていた身体がまた急速にソイツに引き寄せられていく。

「いやあ!？」

『お前の足、ちよつと美味そうだな……………でも気に入ったから食えない……………』

ソイツはそんな支離滅裂で残念そうな一言を添えてすぐ側に引き付ける。

「わ、私はどうすれば良いのかしら!？」

「ああ、撃ちまくれば良いぞ？ 多分ヴェノムが守ってくれるさ」

エデイの声がちよつとだけ笑いながら答える。彼もソイツの行動に困っているようだった。

ヴェノム。それがこの暴れている何かの名前らしい、K a rはぐちやぐちやになった思考で辛うじてその結論だけを出す。

言葉通り弾丸を受け止める盾を身体で作り出すヴェノムに任せて、半ばやけっぱちのK a rが狙撃を開始。だが少しばかりぎこちない動作だ、ヴェノムが首を傾げる。

『どうした?』

「お前の盾が撃ちにくいんだろ、きつたねえカタチにするから」

『ならそう言や良いのに、照れてるのか?』

そう言つてヴェノムは腕をしゆるしゆると分解したかと思うと、銃に合わせた窪みのついた其れらしい形の盾を作つて地面に突き刺す。

『これならどうだ?』

「ええ! さっきの変なカタチよりはよっぽど!」

『じゃあお前にやる』

盾を残して、また腕を伸ばす――。

哀れな獲物に明らかに硬い頭部で頭突きを見舞うと吐き捨てるように

『飽きてきた、同じ味ばつか』

と断言。酷いものだ。

豪快、柔軟、残虐、支離滅裂。ヴェノムは其れ以上に表現が出来ない。

腕を振るえば全てを破碎するし、脚が伸びればまたたく間に目前に居る。身体は意味不明な理屈で変形しては時に腕に、盾に、ワイヤー代わりに。

世界広しと言えども前例のない運動、鉄血達は為す術もなく一体一体、味を貧相なボキャブラリーで酷評されながら噛み砕かれていった。

「ああ、うん。見ての通り味方だ」

『そうだぞ、取り敢えず今はお前ら食わないぞ』

「今以外も食うなよお前!」

エディはまた手を上げてヴェノムと揉めていた。今回はヴェノムが一応顔らしきものを出して会話している、どうやらKar達に話が掴めないのを配慮したようだ。しかしあのバケモノそのものの顔で会話をしてくるのでこっちの方が不安を煽っている所もある。

だがKarも流石に先刻の行動を見た以上、銃を向けるのを躊躇っ

てしまう。

だが他の隊員が軽く怯えてしまっているのも有って、彼女が代表する位置は変わらない。複雑な面持ちで銃を手に取っている。

「形はどうあれ協力者にまた銃を向けるのは、本当に申し訳ないことなのですけど………端的に言って危険である。そう言わざるを得ません」

『分かっているやつだ。正直今も取って食える』

「要らんことを言うな！ いやコイツはこういう事言うけど悪気とかないんだ、な!？」

『悪気はないぞ。事実だ』

——言うほどフオローになってねえよ！

エディは吊り上がった笑いになる。

Karが溜息をつく、何故って彼らの緊張感の無さは指摘できないから。さっきの蹂躪を見せられれば否応なく納得してしまう、そもそも自分達では勝負にならないのだ。

複雑な表情で小漫才を眺めていると、ヴェノムが思い出したようにKarの方を見る。

『お前の名前を覚えてやる。教えろ』

「随分な言い草です………私はMauser Karabiner 98 kurzです」

『も、もーぜか………長すぎ』

「カーでよろしくてよ、ヴェノムさん。でしたか」

ヴェノムが大口を開けて笑いらしき表情を作る。

——何というか、良いモノでは無いのでしょうか。恐らく。

AIとして理解できても感情がそう思えない。Karの表情がいよいよ難解を極めていく。

そんな折、突然人形全員が通信を受け取った。誤魔化すようにKarがいち早く返答する。

「指揮官さん？」

『ああ、俺だ！ 無事だったか。ちよつと心配したが………怪我は在るかな？』

若い男の声が人形たちの脳裏に響く。

指揮官………というにはまだ未熟、着任したばかりの新米だ。今回も本部の要請があつて半ば無理を押しして作戦に参加してる形になってる。

鉄血が来ている間は短距離の電波ジャックをしていたのだろう、彼とは通信が通じなくなっていた。

「此方は無事です、彼ら——エディさんとヴェノムさん？　が助けてくださったので」

『そ、そうか。危険な人物じゃないんだね？』

「危険です」

違う、と通信機越しに指揮官の声色が突然堅いものになる。

『俺が聞いたのは戦術人形としての判断じゃない。君の印象を聞いた、彼らは信用していいと思つたかい？』

Karが二人の様子を見る。エディは単純に作り笑い、冷や汗は止まっていない。

ヴェノムは本当に笑つているように見えるのだが、実際のところ何を考えているのかはある意味分からない。単純な性格にも見えるが、それと同時にこちらの予想の範疇外にいるのも事実だ。

——ですが。

「私は信用して構わない、かと」

「よっしゃ！　助かる！」

『カーは賢いやつだ、やっぱり気に入った』

ヴェノムがKarの横まで顔を寄せてニタア、と一際大きく笑つてみせる。

——やっぱり危険かもしれない。

そのあんまり邪悪な笑顔にちよつとだけ不安を覚えてしまいが、取り敢えず指揮官の言う通りにK a rは自分の感性を信じることにした。

”俺たち”のシゴト

「じゃあ改めて。俺はエディ・ブロック、一応記者だった。今はこの海苔の佃煮みたいなやつとハッピーな共生生活を送ってるしがない一般ピープルってわけさ」

取り敢えず事なきを得たエディは、やはり最初と同じ妙に皮肉のきいた長台詞を言つてのけた。

ヴェノムがひよろひよるとした手を作るとエディの両頬を押さえつける。

『ノリノックダニってなんだエディ！俺を馬鹿にしたのか!?!』

「ジャパンの食い物、俺が美味そうに食ってる記憶ない？」

『……………俺も食いたい。美味そうだから許す』

会話も中々に支離滅裂だったが、エディは彼との付き合い方を心得ているようだった。他の人形達も二人の奇妙な紹介をチラチラと見る。

K a rがこめかみを指で押さえながら、聞いたばかりの驚くべき新事実を復唱する。

「ええつと……………要するに、ヴェノムさんはエディさんの寄生虫に近いものですか？」

ヴェノムが大口を開けてK a rの前まで顔を飛ばすと、まるで犬のように口を開けて吠えた。

『寄生虫って言うな！食っちゃまうぞ！』

「落ち着けよヴェノム！俺達だって常に最高の言葉選びとか出来ないだろ？ K a rだって一緒に、一週間後にまだ言うようだったら考えれば良いだろ、な？」

ヴェノムがエディの落ち着いた説得に渋々という感じで身体に戻っていく。

——本当に便利な身体ですね。

紹介に入るまでの小芝居でもエディ達は滅茶苦茶だった。

急に腕が真っ黒になつてエディ自身を軽くビンタしたり、顔を出したヴェノムが手を作ったり剣を作ったり。まるで感情そのものが形

を持っているようだ。

「ちなみにさつき言ったシンビオート……………ああ、K a rは意味覚えてるかい？」

「要するにエイリアン、ですね？」

「まあそう。その中ではコイツは正直弱いらしい、ついでに俺も社会的に弱い、だから過信は禁物だぜ」

エディの事実だけを説明したそれに文句が有ったのか、ヴェノムがK a rをエディを正面から息のかかるまで突き合わせるとニヤリと嘯く。

『だが、俺たちなら違う。そうだろ、エディ————俺たちでヴェノムだ』

「うーん、多分な」

軽い返事にヴェノムはちよつとばかり不満げだったが、二人を引き離す。K a rは目を白黒させて顔を僅かに赤くしている。

「今の鉄血さんだっけ？ あ那可愛こちゃんぐらいなら勝負にならないぐらいには強いぞ、一応」

エディが笑いながら黒い握り拳でシャドーボクシングをしてみせる。

「弱点は教えない。悪いがK a r達を信用してやるって言えるほど自信家じゃなくてな」

『はっ！ 変なことすりゃ俺に食われるだけだ』

「だからそういう事を言うな！ 力はともかく、俺達は助けてもらってる身でも有るんだぞ！」

『……………分かった』

しゆるしゆるとヴェノムが消えていく。戦闘以外ではある程度エディの言うことに理を感じているようだ。

——身体だけでもなく、精神も良い共生関係。と言うべきなのかしら。

話を黙って聞いていたK a rが彼らの長話に返答をよこす。

「構いませんわ。ですがヴェノムさん、私を食べても美味しくはないと思いますよ？」

『それだ。お前は細い、足だけはいい感じの肉付きで美味そうだが』

「——!? 気にしてるんですから言わないでください!」

ハハハ、とヴェノムが楽しそうに笑う。Karが少しだけ耳を赤くして太腿を手で覆うと、ゆっくりと黒い爪の長い人差し指のようなものがKarの鼻の先にまで伸ばされる。

『食いごたえの有る女にならないと、“シキカンサン”が他の女に取られるぞ?』

「~~~~ツ!? 指揮官さんはそ、そういうのじゃないですから!」

顔を真赤にしてヴェノムの指をブンブンと振り払うKar。当人はそれを水のように受け流してケタケタ笑っている。

ちよつと変な顔をしたエディがピントのズレた質問。

「つてかお前の食いごたえて、異性としての魅力も入るのか?」

『だって美味そうじゃないと目につかねえだろ』

『そういう考え方か。ある意味事実だな』

——お前の中では興味を引くの自体がまず「美味そうかそうじゃないか」だからそういう感じなのね。

要するにヴェノムに正確な恋愛感情が有るかは怪しいということだ。

とはいえ真理では有る。噛みしめる価値の有る女こそ愛されるものだ、それは病みつきでも美味でも変わりはない。

Karが怒っているのを飄々とからかうヴェノムだったが、少し止まったと思うと指をしーつとKarの口に押し当てる。

『オヤツが来たぞ』

すぐさま身体が黒く覆われる、あつという間にエディより一回り大きい巨躯の完成だ。

他の人形達もすぐさま銃を構える。それはヴェノムの戯言ではないようだ。

足を踏み込みながらエディが尋ねる。

「オツケー、ところでKar。俺達みたいなのに何をしてもらえたら助かる?」

「頭を食べないで頂ければと、敵の戦意より私達の戦意が先に削げ落

ちます」

『……………無理だ、腹が減ってる。カーも来い』

そう言って伸ばした右腕でKarを抱きかかえると、ヴェノムは地を砕きながら空を飛ぶ。

突然始まる視界のメリーゴーランドにKarは何故か慣れてしまっていた、身体にかかるGを受け流しながら冷ややかな態度で窘める。

「前もって仰ってくださいる？ 何をするにも準備は必要ですよ？」

『そういうもんか。細かいのは全部エディに言え、俺は苦手だ』

適当に一番背丈の高い木の天辺に着地すると、ヴェノムが真っ直ぐと敵のいる方向に顔を向ける。

Karが他の人形と通信しているのをヴェノムは待っているようだ、エディが少し驚いた様子になる。

「ヴェノム、随分とKarを気に入ったんだな。いつもなら「口煩い女だ」とか文句言うレベルだろ」

『面白いヤツは好きだ』

「全く、貴方の品定めに一喜一憂する自分が悲しいものですね！」

そりや大変だな、とケタケタ笑うヴェノムにKarは溜息も出ない。

素早く敵の数を高所から把握すると、Karはヴェノムの手を引つ張る。触った所が粘り気の有る液体のようになってしまっただけと気持ち悪い。

「一旦下ろしてはくれませんか？ 貴方達は何とも無いでしょうけど、私は銃弾が当たれば壊れてしまうデリケートな身体ですので」

『そんなことか、俺が守ってやる』

「下の子達は守れないでしょう？ ですから、お願いします」

ヴェノムは敵に向かって唾を散らしながら雄叫びを上げる、居場所に気づいた鉄血達が動揺しながらも銃を構えだすのを見るとヴェノムが首を傾げた。

『なあエディ、どうやったら面白くなる？』

「変な荷物はちゃんと持ち主に返して、思う存分暴れるのが正解。お

前、同僚と殴り合いながら楽しくお食事できるか?」

『なるほどな』

ヴェノムがKarごと腕を凄まじい勢いで伸ばすと元いた地面に叩きつける。普通ならKarの体が粉々になりかねない速度だったが、地面にへばり付いた体の一部が衝撃は受け止めているようだ。

Karが咄嗟に何かを取り出すと黒い腕にねじこむ。

ゴムのように引つ張り戻した腕に入っていたのはヘッドセット、のようだ。

『カーは食い物のセンスがない』

『食い物じゃねえよ、ちよっと俺の耳につけてくれ』

エデイが顔を出してヘッドセットをつけると、耳元からKarの声。

「使う機会があるとは思いませんでしたが、非常時用の通信機です」

「こりや良い。これから始まる頭まるかじりパーティーはマジでくそつたれでな、君の綺麗な声で副音声でも当ててもらわなきゃ俺が死ぬ」
『分かってねえ、アレが美味いんだろうが』

また馬鹿というか倫理の欠片もない会話を始める二人を放置して、Karは指示を出していく。

「お二人は銃弾が利かないという認識で構いませんね?」

『こんなオモチャで? 俺を? 見りや分かんだろ』
体中に波紋を立てながら一斉射に平気な顔をしている。

Karも遠方から其れを見て溜息をつく、切り替えたように伶俐な口調で指示を出す。

「では単純、前に出てお好きなように暴れてください。私達が細かい残りや作業を引き受けますから」

ヴェノムが口を大きく開けると上機嫌にエデイに喋る。両手で大きく喜びを見せる姿は見た目の邪悪さに似合わない。

『おい聞いたかエデイ! カーがめんどくせえことは全部やってくれるらしいぞ、お前もゆつくり食えるな!』

「絶ッ対に、自分からは食わねえぞ俺は。まあ——やるか」

二人の息が揃った。

両手を離れた木の幹に伸ばすと、まるでバンジーのように跳ねた。純黒の弾丸が鉄血達に襲いかかる。口径少なく見積もって1mの常識はずれのキャノンだ。

葉を。枝を。木を。そして鉄血達の身体をぐちゃぐちゃにしながら地面にヴェノム達が転がっていく。起き上がるとすぐさま攻撃開始の合図だ。

『全部頭にへんなのがひっついてやがる、エディに食わせるのはアレ取ってやるよ』

「アホなこと言っていないでちやっちやとやるぞ」

四足で飛びかかる。

前衛、後衛、意味がない。ヴェノムの手に届けばソイツは死ぬ、例えば四肢をもがれて。時に頭を食われて。偶に武器代わりに乱暴に振り回されて。

後ろから撃ってくれば背中から手が伸びてソイツを引っ張り回す。三体以上来たなら腹から手が伸びてくる。多少強力な弾丸を用意しようがヴェノムが大雑把に張る身体で作った壁には無力。

陣形はすぐ崩れる、ヴェノムは必ずその中央に来るからだ。拒否すれば一緒に引きずり回し、阻止しようものなら頭を持って近場の木に投げつける。

『まだまだ食えるぞ、最高だ』

「俺は最悪だ!」

一部隊が瞬く間に壊滅、Kar達の差し挟める余地など無かった。また木を真っ直ぐに駆け上ると次の部隊を見つける。すぐにKarに報告してまた戦闘だ。

『お前に言われてからじつとしてるのは正直つまらなかつたが、こりゃ良いぞ! 幾ら殺してもカーは俺たちに何も言わねえしな!』
「代わりに俺の精神がどんどん削れてるんだ、お前ちったあ俺に気を遣え……………つっても、これで遣ってるつもりなんだろうな。はあ」

エディは諦めて縦横無尽に暴れるヴェノムに付き合う他無かった。

「えーっと、貴方が——失礼、貴方達がエディとヴェノムだね？」

『おいエディ、コイツも食ったらダメか？』

「ダメだバカ。いやあすいませんね、コイツとりあえず食おうとする悪い癖が有って」

エディが慣れてしまった愛想笑いとともに横で涎をすすったヴェノムをパチンと軽く叩く。

——まあそうなるよな。

当然四方八方に銃口を向けられて四面楚歌の状態。それでも会おうと言ってくれただけ彼が誠実なのは、勿論エディも理解しているつもりだ。

「失礼を許して欲しい。未知と脅威と不可解が合わさってるとなると、流石に人類なら警戒してしまうんだ」

本当に申し訳無さそうな顔をする指揮官にエディは出来るだけ気さくに笑う。

「分かるよその気持ち。俺も最初にコイツが喋りかけてきた時は頭がイカれたかと思っただし、バキバキに折れた右脚を治されちゃった時は自分の顔を殴って目を覚ましたくなかったよ」

『やっていいぞ、治してやる』

「今はしねえよ」

ヴェノムがケケケと笑うと、銃口がガチャリと一斉にヴェノムに向けられる。新しい家に来た犬のように周りに吠えた。

エディは手を上げ直す。

「あんまりこういうやり方は良くないと思うんだが………そうだな、ヴェノム。全員捕まえてくれ」

『お、殺すか?』

片手間でエディの体中から黒い腕が生えてくるなり、構えていた少女達を纏めて捕まえると縄のような形になって無力化してしまう。

指揮官の頬に冷や汗が流れる。横に居たK a rだけが目の色を変えて銃を構えた。

「ぶつちやけアンタラじゃ勝負にならないと思うぜ? 危害は加えないうって言葉を都合よく受け取っておいたほうがお互い有益だ、俺は懐かしきマイホームに帰りたいたいだけなんだ。マジで」

『何だ。食って良いのかと思った』

「お前はソツチのほうが楽しいかもしれないが、俺はアンにも会いたいんでな」

指揮官が二人の様子をじっと見つめる。K a rの様な威圧混じりのものではないものの、滑り込むように相手につけ込んでくるような、一言で言うところ厄介な性格の見える視線。

しばらくその観察は続いていたが、彼らにとってはどうでも良いことだ。彼らは嘘など一度たりともついていない。

——視線が少し前の柔らかいものに戻ると、ニコニコと手を差し出す。

「そうみたいだ。タイムスリップしたというのはちよつと信じられないけど、今なら俺は殺せただけだからね。今は信用するよ——
——ようこそ、S O 9 地区へ」

エディも安心したように笑うと手を取るが、ヴェノムが伸ばした腕に絡みつく。酷い感触だったはずだ。

「俺は指揮官、と言ってもまだ素人だが………二人にも何か手助けを出来ないかは検討させてもらうよ、K a rを助けてくれた恩もある。凶々しいだろうがこれからも戦ってもらえると助かるよ」

「そうだな、どうせ腹が減るだろうし仕方ない。戦いもさせてもらうよ、俺はエディ——」

エディの笑顔が黒く塗りつぶされた。

黒い塊に飲み込まれたエディの代わりに笑っていたのは不揃いで鋭い歯の並ぶ大口。濁った灰色の目がじつと指揮官を見つめる。

握られた手も一回り大きくなっていて威圧感はあるのだが、指揮官は笑顔をまるで崩さない。警戒心そのものが見えてこなかった。

『俺たち』はヴェノムだ。食い物が有るなら寄越せ——腹が減った』

今言った食い物が鉄血の頭でないというのに気づくのに、指揮官は数秒ほどかかってしまった。

最低なお節介焼き

「ええ、じゃあマジでK a rは俗に言うアンドロイドってやつなのか!?」

「それが近い表現です。皆さんは人形と呼びますから、エディさんもそうした方がよろしいかと」

エディは口を開けてK a rの精緻な横顔を見ながら惚けていた。

——第三次世界大戦、ゾンビ、AI反乱だつて!? ゲームとか映画じゃないんだからよ、神様は加減を知るべきだぜ。

ドルフロ ヴェノムゲームと映画なのだがその話は一旦置いておこう。

納得できない、という様子で引き止める。

「嘘だろ、いや確かに鉄血からは明らかに生き物じゃない感触がした。でも食感なんて俺は詳しくない、肌はスベスベで顔は美人さんで胸は有るんだろ? 俺達の想像できるアンドロイドじゃねえ……………」

『……………こりゃホンモノじゃねえのか、エディ』

ヴェノムが不躰に胸を揉みしだく。K a rがヴェノムを睨むと胸を隠して後ずさった。

「何をしていらっしやるのかしら!？」

『そーいや人間はこういうのニガテだったか。大丈夫だ、指揮官の分は残してやってるだろ?』

顔を真赤にしたK a rがかなり取り乱した様子でヴェノムに怒る。

「だ、だからしょういいうのでは」

「今噛んだ」

ヴェノムとエディが見合わせてニヤニヤする、そこそこ悪趣味な連中らしいとK a rは誤解を始めてしまった。

——うーん。尚更だよな。

しばらくするとエディの顔が大変困ったような思案にふけつたものになる。視線はK a rの顔に一直線に向いていて、腕を組み始めると足踏みする。

段々イライラしてきたのか、足を乱暴に床に叩きつけると頭を掻いて手を振り回す。

「いや無理だろ！ Karをアンドロイド扱いとか出来る気しないぞ!?!」

『アンドロイドだろうが人間だろうがカーは面白い、だからどうでも良い』

「お二人とも結論だけは一致しているんですね」

妙な息の合い方にクスツとKarが微笑む。

エデイが其れを見るなりこれ見よがしに指差す。

「ほら今の！ 今のめっちゃや人間臭くて可愛いし！ もうアンドロイドだろうがあんまり関係ないんじゃないか?!」

「か、可愛い？ それは、まあ有難うございます……………」

『おいおい、カーは浮気性だな』

「そういう訳ではありません！ 何ですか、素直に受け取っただけですのに！」

「うくん、ヴェノムの口に合わないかもなコレ。海苔の佃煮の話したしな」

『ウマくないが腹は膨れる、無いよりマシ』

エデイの皿は綺麗に食べ終わられていたが、顔を出しているヴェノムだけがむしゃむしゃと半永久的に食事を続けていた。

彼らは食堂に案内されるなり、真っ先に信じられない量の注文をした。指揮官に許可は取ってあったとは言え、本当に頼んでしまったのにKarは呆気にとられっぱなしだ。

ヴェノムを放置すると、向かい側で同じく食べ終わっていたKarに話しかける。

「でもこんなに食って悪いな、土地も汚染？ されてるんだっけか」

「それはお気になさらず。他の子達は分かりませんが、私は貴方達に助けてもらった身ですもの。拒否するほど恩知らずではありません」

そう言ってもらえると助かる、と横でひたすら食べているヴェノムに苦笑いする。

「それで、K a r 9 8 k っつてのは銃の名前で？ 銃と君は結び付きがある、これで合ってるか？」

「ええ。鉄血は軍用ですが、私達は元が民間用です。結びつき——烙印システムでもなければ戦えない身なんです」

——よく分からないテクノロジーなんだな。

考えてもさっぱり元手の理論に見当がつかず、エディは軽く流すと次の話題へ。

「というと、君も民間用？」

「その通り、人形は2062年現在では親しまれたものです。労働力、相談相手、友人、恋人だって人形が出来る時代ですよ」

「じゃあK a r は指揮官の恋愛用人形ってわけか」

違います、と目の色を変えて訂正を求める。やっぱりな、とエディは何かを察したように笑うだけだ。

K a r はあんまり二人がからかうものだからそっぽを向いてへそを曲げてしまう。エディが悪かったと笑い混じりに頭を下げる。

「でも好きだろ？ バレバレだぞ」

反論ができず机と見つめ合うK a r の紅玉の瞳を見る。

「俺ならこんな強くて気立ての良い女、アンを知らなきゃ是非ともと思うがなあ。アイツは勿体無いと言うか目利きがないよ、どうやらルビーと石ころの見分けがついてないらしい」

実質べた褒めという感じの軽口を叩くとK a r が固まってしまふ、思ったよりも初心でエディには少しばかり扱いにくい。

——それも含めてアイツは目利きがない、と思う訳だが。

何だか小さくなった背中が可哀想に思えてきて、エディはわしゃわしゃと軍帽越しに頭を撫でてやる。

「まあ粘り強く行こうぜ。君は魅力的だ、鞍替え手前のエディ・ブロツクが保証してやる。諦めなきやアイツだってルビーの光り方が違うことぐらい分かるようになるさ」

艶やかな銀髪が乱暴な手付きで少し乱れる。それでも綺麗な髪なのだから、エディは長く伸ばしているK a r の判断は正解だと思う。手をそつと払われると、上ずった声の調子でK a r がヴェノムを見

る。その顔は火照ったように赤い。

「……………へ、変な話をしてしまいましたね！ ヴェノムさん、もうそろそろ身体に悪いのではなくて!？」

『俺はまだ食いた「つ、次の場所に向かいましょう！ ほら、エディさんも食器を片付けてこなくてはいけませんよ!？」 私は先に出ておきますから!』

そう言うとそのくさとK a rは立ち上がるが、すぐに足をテーブルで打つ。涙目で堪えた後扉に向かうが途中で軽くすつ転ぶ。それでも歩く様には何が何でも外に出ようという意気込みを感じてしまわざるを得ない。

エディはコートの靡く後ろ姿を眺め終わると苦笑いを深くする。

「……………とはいえ、あそこまで来ると手出しには躊躇うだろうなあ」
——アツチも気がないとは違うみたいなんだが。

エディ達を他所に会話をしていた二人の様子を思い出す。K a rもかなり上機嫌にニコニコと喋っていたが、指揮官もアレでかなりデレデレしていた気がするのだ。

指揮官を見ているとエディは「あの男」が頭をよぎるが、K a rが見る目のない女には見えない。それに、K a rが横に立っていれば抑えも利いて丁度良さげにもエディは見えていた。

『何の話だ、エディ』

『指揮官とK a rをくつつけてやろうぜって話だ』

『面白そうだから手伝ってやる、何を食えばいい?』

食つても仕方ねえよとエディとヴェノムが顔を見合わせて笑う。

ヴェノムは意味があまりわかってなかったようだが、取り敢えずK a rが置きっぱなしにした食器も一緒に片付けに向かった。

「ふーん、人間と違いは無いんだな。じゃあ区別しなくて良いな、めんどくせえだろ? お前人形、俺人間って。『タイムマシン』の未来人もなけりやターミネーターと喋ってるわけでもない」

「指揮官さんと同じことを仰るのね……………まあご自由に。世界でも論争が絶えないくらいで、正解も特にございませぬので」

エディとK a rが部屋の案内で廊下を歩いている途中、そんな長話に飽きてきていたヴェノムは後ろを向いてニヤリとした。

『おいエディ、ヘンなの居るぞ』

「何でも良いから取り敢えず食うなよ」

その言葉の通り、ヴェノムはしゆるしゆるとエディの背中から手を伸ばすと、遙か彼方の曲がり角に有る人影を引っ張って連れてきてしまう。

——その少女は長い黒髪に桜桃色の瞳、赤いマフラーで隠した口元でどうにも庇護欲を唆る和風の学生服の少女だった。

『お前、声出さないのか。ちっちゃやくせにエライやつだ』

「ちっちゃくありません！ K a rちゃんはどうしてこの人達を信用してるんですか……………」

エディはその顔にああ、と手をたたく。

確か一〇〇式と呼ばれていた女の子だ。K a rと一緒に自分に銃を突きつけてきていたから、恐らく人形だということまで分かる。

——まーこっちが普通だ。むしろK a r達が柔軟すぎるって言うべきかね。

ヴェノムが値踏みするように緩く絡め取った一〇〇式の周りをぐるぐるとする。

「ジロジロ見ないでください」

『ココは俺好みのヤツが一杯だな、お前も面白そうだ』

「貴方に気に入られても一〇〇式は嬉しくくないです、敵だったら容赦できないですからね……………」

一〇〇式の目が明確に敵意を帯びて燃えている。K a rも困ったように頬に手を当てて乾いた笑いをしているだけで手立ては思いつかないようだ。

だから、エディは一〇〇式の前に立つ。

「じゃあ一発顔を殴ってみると良い」

「エディさん!？」

『おいエディ、何考えてる』

「ヴェノム、お前は手を出すな。細かいことは俺の仕事、だろ？」

少しばかり不満そうな大口がエディの中に消えていく。

一〇〇式がたじろいて視線を逸らすのを煽るようにエディが手を広げてガタガタ笑う。

「おいおい、俺はヴェノムを引つ込めてるんだぜ？ 要するに一般人だ、人形あるあるの人間に危害は加えれないも俺には通用しない。じゃあ出来るだろ？ やらなきや逆に殺すことも出来るんだぜ、俺たちは——」

言葉の途中で思いつきり殴られる。明らかに歯の折れた音にエディの頭がグラグラとして視界が明滅していく。

とはいえ仮にもシンビオートが寄生した身体だ、それが数メートル吹っ飛ばす凄まじいパンチでも一応頬を擦って起き上がれる程度である。

「イツテエー！ 一〇〇式のパンチ強いなオイ、カールトン・ドレイクが今俺に手を振ってきてやがったぞ。アイツの笑顔を思い出すだけでこう、殴りたくなるんだよなチクショウ！」

『何したいんだお前』

「いや今抵抗しなかったからさ、これじゃ信用に足らない？ 腕折つてもいいんだぞ、治るし」

ほれほれと飄々と起き上がって腕を差し出すエディ。巫山戯ているようだが言葉自体は大真面目なものらしい。

一〇〇式がエディを見て怯えたように慄く。瞳は強がりが見せて化物でも見るように揺れ始めた。

——やっぱりか。

此処ぞとばかりに一〇〇式の頭を撫でる。当然頭は逃げていったが、ちよつとだけ強引に。

「俺は怖いやつじゃない。一〇〇式が殴れば痛いし、吹っ飛ばし、歯も折れちまった！」

エディがカラカラ笑う。

「まあ治るけどな、俺たちは出会い方が——あく、最悪過ぎただけ

さ」

「一〇〇式は黙りこくって返事をしないが、エデイの手を払う様子もない。」

——ヤバイ、泣かせちゃったかな俺。

「ちよつと不安になってきたエデイが前かがみになって俯いた一〇〇式の顔を見る。」

「いや悪かったよ、俺の顔硬すぎだったか？ 別に俺を殴ったのは気にすることじゃないぞ、殴られるのは大好きだ。ご覧の通り相方がインファイトばつかするからな、ヘンタイじゃなきや無理そうだろう？」
『エデイはフォローがヘタだ。そんなことだからアンの尻尾も掴めねえ』

「ちよつと黙ってるよ海苔の佃煮！」

『やっぱりバカにしてるな、エデイ!?!』

エデイが飛び出てきた太い黒腕に軽くしばかれる。エデイがムツとした顔で手を引っ張り出してヴェノムの顔を往復ビンタ仕返した。

一人で喧嘩が始まる。

「実際海苔の佃煮だろうがお前！」

『俺はあんなウマいだけの飯じゃねえぞ!』

「あーそうさ、むしろ迷惑ばかりで困ってるんだよ俺はさ！」

『何だど?! 俺がいなきや何度死んでたと思ってやがる!』

口論がうるさくなってきた二人の頭をKarが一方的に抑えつける。

「どうして二人で喧嘩が始まるのですか、しつかりなさってください」
『だってコイツが!』

『どっちも悪いです。はい、おしまい』

まあKarで押し止められる時点で本気ではないのだろうが、それにしても睨み合うと威嚇しあっている。

複雑な表情をマフラーで隠してしまった一〇〇式の方を見て、エデイが遅すぎる愛想笑いをして誤魔化そうとする。

「こんな感じだからさ、君を取って食べたりはしない。な、ヴェノム」
『ウマそうでは有る』

「バカ！ これだから海苔の佃煮は！」

ヴェノムとまた喧嘩が始まるのではないかとK a rが懸念し始めた時に一〇〇式がボソリと

「ごめんなさい」

とだけ言うと凄い勢いで走って逃げてしまった。

K a rが取って付けたように笑いながら軍帽を被り直すと、エディに補足説明を入れる。

「怒らないで頂けると助かります。一〇〇式ちゃんの言う通り、正直私の方が奇妙なのですし」

「怒っちゃいけないさ。ただ化物から海苔の佃煮に降格しとかなないと………明日一〇〇式がお漏らししてるかもしれない」

「それは分かりませんけどね」

K a rが困ったように彼に返事をする、彼らはまた部屋に向かって足を向け直す。

「此処が貴方達に割り振られた部屋番号ですね」

「結構広そうだな、俺たちのボロアパートとそんな変わらない」

玄関から部屋を一望してエディは軽く頷く。

キッチンや冷蔵庫と言った類こそ無いがスペースだけはしっかりと確保されている部屋だった。エディの懐かしきマイホームとやらより一回り小さいぐらいで済んでいる。

しかし、一通り見て回ってからエディは青ざめた顔をする。

「待て、バスルームは？」

「ありませんよ、大浴場を共用です」

「女と!？」

「どうしようもありませんわ。私達は平気ですから、どうか気楽になさって?。」

冗談じゃないな、とエディは軽く頭を搔く。

ヴェノムはウロチョロとK a rにちよっかいをかけてばかりでそ

こら辺の事情には興味が無いようだ、K a rもK a rで上手く流し始めた辺りは何だか姉弟のような所がある。

「ちなみに私は隣の部屋ですから、困ったら気軽に訪ねてきてくださいね」

「は!?! K a rの隣だつて!?!」

エディが半狂乱に叫ぶのに、気圧されながらK a rが頷く。

「え、ええ……………嫌、だったかしら」

熱っぽい視線が足元へ逃げていく、瞳だけでまるで落ち込み具合がエディに伝わるような、釘付けにする仕草にエディがどきまぎしてしまふ。

急いで訂正する。

「あー君が嫌いとかじゃない。そうじゃなくて、それは指揮官がそうしろつて…」

「そうですけど」

「アイツも馬鹿なのか!? おいヴェノム、例の奴は急ぐぞ。コイツラヤバイ」

『俺は好きに使え。面白けりや付き合つてやる』

エディがわあわあと喚くの慣れてしまったK a rは、まあ良いかとすぐに扉をくぐつてしまふ。

「それではごゆっくり。疲れたでしようし」

「え、ああ。そうさせてもらうよ……………ん? 何だヴェノム。顔出して喋れよ」

エディが突然に一人で喋りだす。

どうやらヴェノムが何かを言っているようだが、顔を見せていないからK a rには聞き取れない。

自分は邪魔と判断したのだろうか、K a rは音を立てないようにゆっくりと扉を締め始める。

「……………余計なお世話だ、と言いたい所だが……………分かった! 言えば良いんだろ言えば!」

「ちよつと待つてくれK a r」

扉を締める本当に寸前、ピタリとK a rの手が止まる。

急ぎ足で扉から顔を出したエディは照れくさそうな、困ったような複雑な顔つきで頭を搔く。

「どうかしましたか？」

「いや、えーっと……………遅れたんだがあの時信用してくれたこと、まだ礼を言っただけでなかったら？」

「え？」

ヴェノムがチラリと顔を出してケケツ、と笑う。

『コイツ、ずっとそれを言いそこねてた。前もこうだったんだぞ』

「色々な理由があったんだろうし、俺に感謝される筋合いなんて無いかもしれないが……………君が信用する、と言ってくれたから穩便に事が進んだのは本当だ。ありがとう」

それだけだ、と言うと今度はエディの方から扉を閉めようとする。

Karは特段それを止めようとはしなかったが、一際柔らかな微笑で

「此方こそ、助けてくださって有難うございます」

と答えるのを最後に、扉は完全に閉じられた。

——そういう顔は指揮官にだけしておけ。

なんとも言えない複雑な顔つきでエディはベッドに飛び込んだ。

シンプル・イズ・ベスト

『だから、要するにケガしたやつのお守りか?』

【その乱暴な言い方は正しい、今回の作戦はそういうものだ】

モニター越しにモノクルが光る。エディはヴェノムが勝手に返答するのにも内心ヒヤヒヤだ。

——朝っぱらからハードだな、全く。

指揮官に呼ばれて朝早くから戦術司令室に来たのだが、始まったのは此処——グリフィンの「本部」の代行官との有り難いお話だ。

彼女はヘリアントス。金の鋭い瞳と銀灰のくせつ毛が特徴的な女性だが、制服らしい赤いそれをがっちりと着込んでいる感じからエディは直感的に「モテない」と断定したりした。失礼極まりないが、それは滲んでいなのだ。

『その情報は大事なのか』

【ヴェノム。貴方にこちらの価値観は肌に合わないだろうが、情報戦というものは現代では最優先とするべき事柄だ。武器よりも何よりもまず情報が——】

『分かりにくい、簡単に言え』

つつけんどんにも聞こえるヴェノムの物言いに指揮官まで顔を強張らせている。恐れ知らずとはこういうものと言う。

しかしヘリアンは特段怒っている様子はない。むしろ

【すまない、では簡単に言おう。情報が関わるなら頑張ってくれ、もつと暴れられるぞ】

『俺にメリットが有るわけだ、じゃあやるぞ』

【そうしてもらえると助かる】

——アンタ、大物なんじゃないか?

エディの正直な感想だ。ヘリアンはその失礼とかを超えた態度に對してあっさりとした返答を超越す、意外と融通の利く上司だと感嘆ものだ。

だがエディは昔の職場を思い出すと、大きな溜息をついてしまう。

『どうしたエディ、腹が減ったか』

「違う。ヘリアンみたいな上司が居れば、俺は人の頭食うやつと同棲してないって思ってたな」

『いい同居人だろ?』

「考えうる最悪の同居人だ」

またつまらないことばかり、と呆れた調子でエディから興味を逸らすとヘリアンとの会話を続ける。

『で? そのお守りするやつと食っていいやつはどう見分ける』

エディも同じ様な呆れた様子で横槍を入れる。

「俺が見れば分かる、お前と違って敵か味方ぐらい見分けつくからな」
『食えるか食えないか以外なんてどうでもいいだろ』

「俺達は美女には色目を使うし、性格悪そうなやつには靴の裏にガムを引っ付けるもんなんだよ。ちなみに美女はアン、ガムの生贄はカールトン・ドレイクな」

分かりやすい、とヴェノムが大口を開けてニヤつく。

妙な意気投合をする二人を他所に、指揮官とヘリアンで何やら話し合いが勝手に続いていた。

「ヘリアンさんは彼らを警戒しないんですか? 俺は正直、かなり私的な理由で信用してるんですけど」

「二人共意見は明確だ。ヴェノムは「食事」、エディ・ブロックは「穏便に」。そもそも、変に事を荒立てた所で此方が損害を受けるだけだろう」

「なるほど、それは俺も同意見です」

「さて、という訳で仕事だ仕事。俺は記者だった頃に戻りたいがな……」

『前を向けエディ、俺たちの飯が待ってる』

誰が食うかよ、とエディが軽くはたとくとヴェノムはせせら笑う。

硝煙臭い街の跡地、報告によると周辺300メートルの時点で結構な数の鉄血が居るらしい。ヴェノムは最初こそ喉を鳴らして上機嫌

だったが、その大体が機械パーツまみれの通常型だと聞くと途端に機嫌を悪くした。

横で二人のやり取りを聞いていた一〇〇式が変な顔をする。

「また食べる気なんですか……………」

『鉄血はクセは有るが悪くない。何より食った方が速いぞ?』

「一応言っとくが俺はこんな阿呆なことは考えてない。優しさが一〇〇式にこれっぽっちでも有るって言うなら、ぜひともコイツが食い出す前に蜂の巣にしてくれると助かる。正直つらい」

意見の食い違ふ二人を見合わせて一〇〇式は当惑する、横に居たトンプソンが肩を叩く。

「まあ要するに全部ぶっ倒してくれるんだろ? 単純明快は長所だ、なあ?」

『そうだ。お前は話分かる奴だな、良いぞ』

言った側から飛んできた銃弾にヴェノムが身体で壁を作るとせき止める。

——もうアツチはやる気満々らしいな。

声も合わせずに変態したヴェノムが飛び跳ねる。どうやら銃弾の方向が正確に見えているのだろう、横の崩れかけのビルの壁に四肢をめり込ませて構えると吠える。

『わかったぞ、えーっと。エディ、こっちはどの方角だ。分からん』
「三時の方向から複数だ! これぐらい覚えろ、Karにも聞こえてるか!」

ヘッドセット越しにエディが叫ぶとKarが簡潔に「Ja」とだけ答える。ドイツ語で「はい」、の意味だそうだ。

「オツケーだつてさ、じゃあ行くか」

『食えなさそうならぶっ壊す』

「食えそうでもぶっ壊せ、食うな」

エディの合いの手など届かず、弾丸のようにヴェノムが一直線に敵に飛ぶ。

あまりの速さにエディも情けない声を出す、すぐさまゴムのように横の建物にへばりついた触手で勢いを殺して着地する。眼の前の

四足歩行をする機械を片手で掴んだ。

長い舌で軽く表面を舐めると、目を細めて舌を引っ込めた。その姿にグリフィンの掲げる大義名分など何処にもなく、純粋な欲だけが濁った悍ましい眼を輝かせる。

『これは……………無理だな。つまらねえ!』

群れていた別の四足歩行——Prowlerに向かって投げ飛ばすと暴れ始めた。

それを確認した一〇〇式達が少し違う方角に走っていくのを彼らは見向きもしない。

——これで時間稼げば良いんだっけか。

エデイが確認する通り、今回の仕事は時間稼ぎだ。理由は単純で、「救援に向かうにも悪目立ちする」から。

一応補助及び監視として狙撃手を務めるKarを見張りに付けた以上、彼らの動きに制限はない。

『コイツラ全部ムリだ、ぶっ壊す』

そう言うのと激しい弾幕など無視して中央に突っ切ったかと思うと、這っているProwlerを掬うように両腕で一気になぎ倒す。

逃げるにも鈍足なのでまるで勝負にならない。異様に伸ばした触手で瞬く間に周囲のProwlerを絡め取ってしまうと、ボールのように一つに固めて右手に繋ぐ。

ガタガタと擦れる音や時折火花の散る音がするのも無視して塊を眺める。

「名案だな、振り回しとけばぶっ壊せるぞ」

『ライオットのアレを真似した』

そう言いながら飛んできたScoutに塊を横振りに投げつける。近場の三体が一気に爆発するとヴェノムは体ごと捻り、塊に身を任せ飛び上がる。

ビルの残骸が多く有るおかげで所々に触手を引っ掛けては、塊だけで薙ぎ倒して次の群れに走る。彼らがビルを掴む毎に壁が軋み、時折落ちては急降下で通りざまの鉄血を擦り潰して行軍する。

飽きたのか、一旦降りてくると塊を身体で呑み込んでしまう。中で

エディが叫んだ。

「うわ痛！ トゲトゲしてるじゃねえかよ！」

『だからこれでぶっ壊す』

好機と見て寄ってたかる鉄血達に鉄屑の乱射が始まる。

ヴェノムの身体から鉄片が爆発するように飛び散り、辺りに居た鉄血を分別も付けずに破碎していく。無造作に飛んでくる歪な弾丸を避けきけることは敵わない。

ひとしきり鉄片を出し終えたのか、ヴェノムが気持ち悪そうに体をならすとまた壁に飛びついた。

『次』

「ではB-3に移って鉄血を襲撃してください。人形も居ますよ」

人形という言葉を聞きなり舌なめずりしてヴェノムがはしゃぐ。

『つまり食えるんだな。エディ、早く指示しろ』

「分かってる！ えっと、取り敢えずあっちのビルのちようど向こう側へ行って、そのまま一直線に向かえ！」

大体トンプソン達の進んだ方向と平行だ。ヴェノムが壁を蹴り碎きながらビルに飛び移ると、四足歩行で指をめり込ませながら壁を真横に走り抜ける。

ちようど反対まで来るなり、ヴェノムが腕をしならせて遠くのビルにへばりつける。

凄まじい勢いで身体が引き寄せられていった。

「おい俺はジェットコースターで吐く男だぞ、やめろ！」

『速いのは良いことじゃねえか！』

まるで大砲でも撃ったような着地音でビルの壁がメチャクチャになる。そのまま自由落下をすると近場のRipperを腹から掴んでニヤリと笑った。

人形という不完全なAIでも理解できる明確な「恐怖」。Ripperはふるふると首を振って震えるが、ヴェノムは観察すると舌で頬を舐める。

『よう。良い飯食ってるか？』

エデイが溜息。

「まあ、多分答えは」

『興味ないけどなっ!』

大口を開けて呑み込むと、バリボリと頭を噛み砕いた。エデイが呻く。

『食えば分かる。お前は良い飯食ってないな』

遠くからJeagerの狙撃が飛んでくるが、ヴェノムは身体で呑み込んでしまうと明後日の方向に居たVespideに撃ち返す。脳天に突き刺さった弾丸に機能停止。

ヴェノムが悦んだようにケタケタ口を開く。

『当て方が分かってきたぞ』

「まあシンビオート様が無敵に近づいてるよ、その調子で俺の身体から出ていって元気にやってくれ」

『お前より良い乗り物は中々無い、諦めろ』

「マジかよ……………」

ヴェノムが乱暴な動作で走ると、近場の鉄血を持つては放り投げる。

弾丸を向けられると振り向いて飛びかかって食い千切る。グレネードなんて使おうものなら伸ばした腕で引っ張り上げて鈍器代わりに振り回すだけ。

百は超える玉石混交の鉄血がまるで蜘蛛の子を散らすように逃げる。

ストップピングパワーも、射速レートも、取り回しも、生産性すら『最悪』の前には無力。

スコープ越しに眺めていたKarも、その反則としか言えない戦闘力に内心怖気立ちながら見守ることしか出来なかった。

「うわ、酷えなあ……………こつちまでぶっ壊してる音がするぞ」

トンプソンがわざとらしく身震いしてみながら走る。薄暗いビル

の地下駐車場跡地を通っていく。

彼女達の救援作業は「囿」の随分な暴れようのおかげで順調そのものだった。救援に向かうような、そうでもないような奇妙なルートを取らせているのも有って一〇〇式達とどちらを狙うべきか鉄血はわからないのだ。

とはいえヴェノムに助ける云々の観念がないのは、二人共よく分かっていることだが。

「敵だったらと思うとゾツとします……………」

「でも味方だ」

「……………」そうですね

一応味方と認識するようにはなったのか、少し複雑な表情で頷くと

一〇〇式達は走る。

もうすぐ救援信号の位置だ。

——後数百メートル。

そこで事は起きた。

同時に凄まじい量の銃の構える音。

「えっ……………」

ぞろぞろと出てくる鉄血に一〇〇式達が呆気にとられていると、柱の陰から妙な女が出てくる。

やたらと癖の激しい巻き毛の束を二つ垂らした、真っ黒な装束の女。口元のガスマスクは見るだけで相手への拒絶感を醸し出していて、周りに浮いた時代の違いすら感じるビットの群れが値踏みするようにあちこちを飛び回る。

銃弾は放たれない。静かに一〇〇式達は銃を置いて手を上げる。

「物分りが良い、というのほそれだけで美德ですよ」

上ずった悦楽混じりの女の声に、トンプソンが舌打ちした後尋ねた。

「お前が今回のヴィランかよ」

「まあそうです、名前は語りませんよ？ そんな事をすれば、後で面倒

なことが起きますものね？」

——馬鹿じゃあねえか。

トンプソンが唾えていたココアシガレットを吐き捨てる。

女はビツトで「何時でも殺せる」と脅しながら手を上げた二人の体中を不躰に観察すると、少し経って口を開く。

「では簡潔に。アレは何ですか、教えなければ貴方達は粉々ですが」

「言ってる、通信は筒ぬ——じゃねえな。ジャミングとは念入りな奴め」

「質問に答えなさい。今すぐ殺しても良いのですよ、わたくしは」
通信途絶に苦い顔をしたトンプソンは女を睨め付ける。

——ビツト持ちか。しかもこの調子だと今頃私達が順調に向かっている「ように見える」ダミー信号をアッチに送られてるな。

地下なのも有ってK a rの救援は望めない。状況は絶望的だ、それを知っているからこそ女は強気にもう一度問う。

その時。小さく、とても小さく何かが砕ける音がした。トンプソンがそれが聞こえた途端、少し目を丸くする。

「さあ、早く」

「いやあねえ？ グリフィンと人間は裏切れない、私達の最大の特徴で欠点だから無理だな」

トンプソンがケラケラ強がるように笑い飛ばす。女がそれを不愉快そうに一瞥すると、次は横に居た一〇〇式に視線を向けた。

——どうすれば。

思わずトンプソンに視線をやってしまうが、彼女はいつもどおり不敵に笑っている。一〇〇式の望む返事は得られそうになかった。

だが少し違和感はある。トンプソンは幾ら何でも余裕な素振りが自然過ぎる、強がっている感じではなかったのだ。付き合いも長いからそれくらい、ある程度は分かる。

思案を催促で途切れさせられた。

「あなたも何も話さない、と？」

「当たり前でしょう、お前達に命乞いできるほど恥も外聞もないA Iとして作られてない」

「なるほど、一理ありますね」

女が手を挙げると、一齐に銃が構え直された。

思わず一〇〇式が目を瞑る。幾ら強がろうと彼女だって死は怖い、例えA Iでも自分を喪う恐怖を克服できる事などあり得ないのだ。

吐き捨てるように不機嫌を示す。

「正解であり、最低でしたわ。死ね」

「——いいや、最悪だろうな」

トンプソンが叫ぶ。

「頼んだぞ、ヴェノムツ！」

【任されたぜ】

二つの声が絡み合った歪な音が地下駐車場を響く。

女が事態に気づいて振り向いたがもう遅い。其処には舌なめずりをする大口の化物、黒い巨軀を今か今かと奮わせて走りださんとする「ヤツラ」が居た。

急いで女は指示を出したが遅すぎる。その手に握られた首なしの屍体を見るだけで鉄血達が慄いてしまった。

ヴェノムが屍体を片方捨てる時、女を指さして舌を頻りに動かす。

『一応ソイツらは仲間だからな、売られたケンカは買ってやる』

「そうそう。という訳で世界最悪の死に方をさせてやるから、精々苦しんでくれ」

凄まじい速度で屍体が女に投げつけられる。咄嗟に避ければもう戦闘は開始だ。

恐れども乱れない鉄血達の一斉射。しかしヤツラにそんなものは通用しない、けろりとした顔で身体に波紋を立てる銃弾を見つめる

と、大口を開いて近場に飛びかかる。

『痛くも痒くもねえ!』

振り回しながら鉄血達の四肢を殴り砕くと縦横無尽に駆け回る。段々と戦うだけの冷静さを取り戻してきた鉄血だったが、追い打ちをかけるように一〇〇式達がスモークキンググレネードを投げつける。途端に白く包まれる視界に、数の多い鉄血達は変に味方を撃てないと撃ちあぐねだした。

鉄血は優秀だ。優秀だからこそ、数の利が無ければ勝てないことも分かっているのだ。

『弾はウマくねえ、撃つてこないなら最高だ!』

ヴェノムに敵味方など無い。一〇〇式達も分かっているから距離を取る、よって彼らには着実な有利が其処に在った。

一体、二体、三体と削られていく戦力に苦虫を噛み潰したような顔をしながら女が呟く。

「お前達は一体、何者——っ!？」

瞬く間に女の目の前に現れた巨躯。心底愉快そうに嗤うような大口から顔が半分裂けていったかと思うと、男が答えた。

「俺たち? 多分、世界最悪のヒーローってやつさ」

重みの乗せられた乱暴な殴打を受け、女が弾き飛ばされていった。